

紙魚想考 (四)

水野正好

玉津田中遺跡の鬼字重書符

兵庫県明石市にある玉津田中遺跡は、兵庫県教育委員会が長年にわたり発掘調査した重要な遺跡である。その発掘資料の中に、興味をひく一枚の呪符がある。巾ひろく、長い札面をもち下端を尖らせた木札である。表面には下方に「急々如律令」の句を配し、その上に、下から尸字の下に一鬼を、ついで二鬼、三鬼というように七鬼までの墨書がたしかめられている。それ以上は墨字が消え読み取れないが、十分な余白があり、八鬼、九鬼とつづいていたのであろうことを推測させる状況であった。

この呪符の顕現で、類例の存在が改めて注目されることとなった。たとえば『修験常用秘法集』・二の第十八項「疱疹の守並癩疹」、『修験深秘行法符咒集』の第二六項「疱瘡呪」として掲げる呪符一紙符がそれである。この二書の符は酷似し相互に補完し合う関係にある。

前書では、紙符の中央から上部へ鬼字を一・二・三鬼と横並びさせつつ重ね計一〇段五五鬼を書き、中央から下部へは「天王御子六十一急急如律令」の句を配し、この符と句の接点に以点式に四種字を置いて符・句を守護している。後書では以点結果を欠き、句も「天王之御子は六十二唵々如律令」と訛転して記されている。一方、こうした札とは別にこの二書にはこの符をめぐる行法が記されている。前書では「包紙、表シリイ・カンマン・ウン、裏ボロン・ボウ・ウン・加持、常の如し。薬師の眞言これを唱ふべし、其の他任意」と簡記されるに留まるが、後書では、詳細に「紙一枚に右の通り書く、此の上に年の



数だけ薬をわけて、其の上に童子を立たせて、其の後童子を枳里枳里の咒、訶利帝の咒、オン・ドトマリ・キャキティ・ソハカを誦して加持。次に大豆四五粒頂上より落とす也。咒訖板の上にて絵も薬も焼て川へ流す可し。而して彼の守は之を懸けしむ可し也」と記している。

疱瘡一癩疹呪としてのこれらの符が、玉津田中遺跡の呪符と共通する鬼字のあり方を示す事実が浮かび上がるのである。ただ、この場合、玉津田中遺跡例に見られる尸字が、両書の鬼字には見られないこと、天王御子六十一（天王之御子は六十二）の呪句が逆に玉津田中遺跡例には見られないことが指摘されるのである。

ここで注目されるのは『まじなひ秘伝』の三符である。一符は、咄吠啞の三字を頭書きし、下に劔先から七星を出し左右に三目、計六目を置き、髪の鬼面を描き二神を並記、牛頭天王の文字をもって終わる呪符、一符は、尸字下に九鬼並列、ついで尸字下に六鬼と二鬼、計八鬼を配置、以下尸字下に一鬼ずつ減じて記し、急々如律令の句で終わる呪符である。続く第三の呪符は、口字を三横五縦に並べて結線し、尸字下に口字を四字横列、下に鬼字を四・三・二・一鬼とおき急々如律令の句を据える呪符である。第一の呪符には、牛頭天王の名が見え、しかも「大門ニ可立」の註が付され、第三の呪符には「一切ノ悪魔ヲ拂守也」の註があり、その機能は明瞭である。第二符は、第一符と並記され、第一符と共に用いられる符と考えられるから、その機能が牛頭天王と関係し、大門などに立てられるものであることが判明する。

玉津田中遺跡発見の鬼字重ね書呪符は、上部が失われているが、恐らく九鬼なり十鬼を記すものであったと推測することが出来るから、この『まじなひ秘伝』の符とあざやかに吻合、一致することとなるのである。

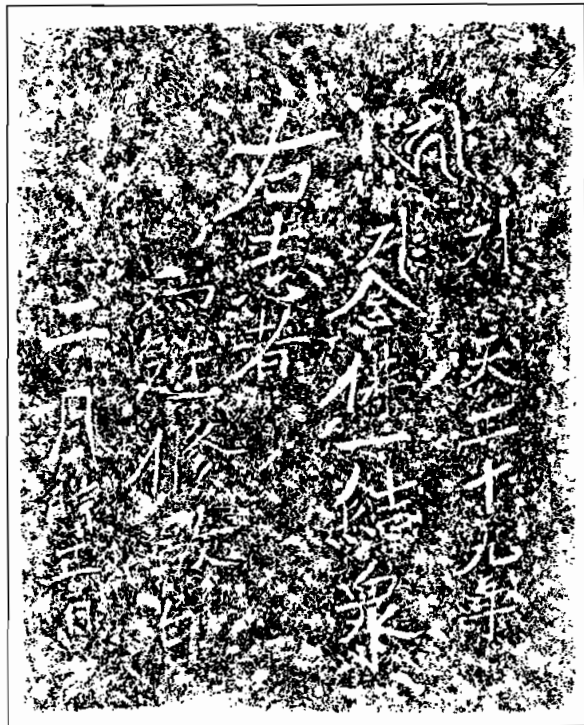
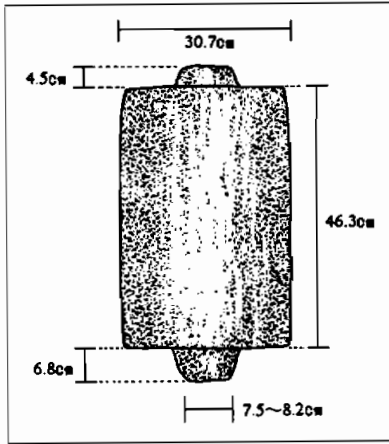
このような呪法書に収められた呪符から、発掘された玉津田中遺跡の呪符の性格が判明すると、いくつか興味ぶかい事実が指摘されることになる。こうした検討を通じて、さきの『修験常用秘法集』や『修験深秘行法符咒集』の中に、疱瘡呪符として掲げられた札の「天王御子六十一・天王之御子は六十二」の句に見られる天王が実は中世、席卷した牛頭天王であることが確かめられ、六十一（六十二）はその子神であることが判明するのである。一般に、牛頭天王は妻婆梨采女、子神八王子（八将神）、眷属八萬四千六百五十四神王からなる壮大な神統譜をそなえていると説かれるが、別に六十一（六十二）の御子神伝承が息づいていることを知りうるのである。御子神六十一（六十二）神の内容はいま究めたいが、こうした一鬼から十鬼に至る傘形の鬼の在り方は、鬼の隊列というべきものであろう。鬼が群れをなして動く様は、『本朝法華験記』所載の道公の話にも記され、「百鬼夜行」の言葉にも端的に表現されている。恐らく、疱瘡神や行疫神のイメージに、こうした根源的な「鬼」とその「隊列」が重ねられていたのであろう。急々如律令の句は、「疾く鬼よ去れ」の意、したがってこの種の呪符は、家、屋敷の門や戸口に挿したてられ、入り来る牛頭

天王とその御子神（疱瘡・疫神）を防護しようとする意図をもって機能していたものと考えるのである。

一 結衆時正日建立の石塔

高さ四六・三センチ、径三〇・七センチの円柱、その上下両端に衾をつくりだした石材が発掘された。思い当たるものがない石造物である。材質は花崗岩、僅かに円柱の径が上部にすぼまるように感じ取れる。問われてあれこれ石造物の中から私が選びだした形は、宝塔の軸部、異形の軸部ではあるが高くしつかりした衾を下の台座に据え、上部のやや小さい衾を笠うけの衾とすれば、描ける姿は宝塔しかないのではないかと考えられたのである。

いま、この石造物を異形ではあるが宝塔の軸部と見れば、高さは一尺五寸、直径は一尺、衾の高さは一寸五分、二寸二分を期してつくられていることとなる。その場合、この宝塔は比較的小ぶりの宝塔となるであろう。



大阪府庁舎周辺の整備事業が始まる中で、先立つ発掘調査が大阪文化財センターの手で実施された。その場所は府庁別館の南側、江戸時代の大阪城京橋口定番所跡推定地という。一九九〇年一〇月、調査地の一画から発見された特異な遺物がこの円柱材―異形宝塔袖部であった。発掘の時点では台座も笠も伴わない単独の発見というから、解体されもはやセットにならない形でこの地に運びこまれていたものと考えられた。

実は、この軸部には刻銘が見られる。花崗岩の材質の故もあって読

みとりにくい文字もあるが、中央に「右志者」の文字を刻み、「阿弥陀三尊種子」を配し、「天正十九年／念佛一結衆」の文字を二行に刻み、左側にも同様三尊種子を容れ、一段文字を下げて前二行に合わせ「為逆修敬白／二月時正日」と三行に刻んでいる。一結衆の句、時正日の句が見え興味を惹く銘文である。

時正日は、『善庵随筆』に「春秋ノ二分ハ、日正東ニ出デテ正西ニ没スル故ニ、天竺ノ俗、コレヲ時正トイフ由ナレドモ、此時ニ彼岸会ヲ修スルコトハ、佛経ニ所見ナシ、十六観経ノ日想観ノ文ニ、正座向レ日、諦観於日、専想不移、見日欲没、状如懸鼓ナドアリテ、日想観ハ必シモ時正ニ限ルコトニハアラザレドモ、浄家ニテ、時正ハ日正東ニ出デテ、正西ニ没スレバ、日想観の時節トセルヨリ・・・」と書き時正日の性格を説いている。

時正日は昼夜等分の意あって、春秋彼岸の中日を指す言葉である。この時正はまた太陽が真東に出て真西に沈む日であるから、日想観に最適の日でもあった。それだけに、『新古今集』の「今ここに入り日を見ておもひ知れ彌陀の御国の夕暮の空」、「夫木和歌集」の「けふ出づる春の半の朝日こそまさしき西の方はさすらめ」といった歌は、この時正日、二中の入日の赫々たる輝きと日想観、昼夜長短等しい朝日を歌趣に採っているのである。

善導の『観經正宗分定善義』には「唯取ハ春秋ニ際、其日正東ニ出テ真西ニ没ス。彌陀仏國ハ當リ日没処ニ真西ニ超ニ過ス十萬億刹」とあ

るが、こうした思想が日想観を重視させ、日想観を長く実修させる根拠となつていたのである。日想観は沈み行く夕日に向ひ正座し極楽の様をこれに重ねてその懸鼓のように落ちていく夕陽に極楽往生を重ねる想観であり『観無量寿経』の説く十六観の第一に位置する想観でもあった。

こうした彼岸会、日想観の聖地は荒陵山四天王寺である。春秋の彼岸にこの寺に群集する貴紳衆庶はまことにおびただしい数、時正日はそのピークをなす日であった。難波、大阪は四天王寺の存在によって一層つよく彼岸が息づく地になるのである。彼岸は転迷開悟のための法会を修し、民間にあっては仏事を修し祖先を祠り死者の追善、冥福を祈る、そうした日として定着しているのである。

こうした民間の彼岸の姿を具体的に記すのは『日次記事』であり、「凡京師俗、彼岸中偶逢親戚之忌日、則供茶菓而祭之、以其祭余之菓互相贈、或請親戚朋友而饗茶菓、彼岸中称菓子日茶子、點茶曰立茶、食麩焼曰読経、倭俗彼岸中專作佛事、民間請熊野比丘尼、使説極楽地獄図、是謂掲画、又請巫女代死人使説所思、是謂寄口也、或念佛講中、男女每夜聚頭人宅掲彌陀像、鳴鉦高聲唱彌陀號、其終高揚音急唱之、是謂責念佛」と記す。

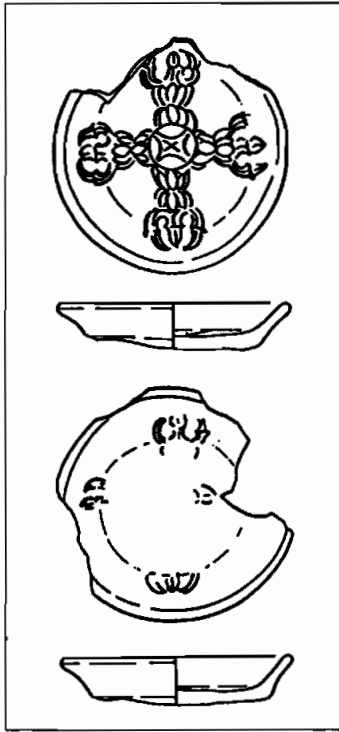
彼岸、民間では念佛講中の男女が頭人の元に集まり阿弥陀を恭敬し、鉦を鳴らし聲高に阿弥陀号をとる様子が見事に描かれ、また茶菓

の役割が那邊にあるかを巧みに説いている。大阪城京橋口定番所跡発見のこの異形軸部に刻まれた一結衆こそ、こうした念佛講に通ずるものであったことが容易によみとれるのである。一結衆が阿弥陀で繋り、講衆からの浄財をもとに、あるいはこの際に結縁奉養を求めて造立したのがこの石塔なのである。

造建され置かれた場所は、この石塔が動かされ運ばれたものだけに最早や求め得ないのは残念であるが、天正といった時期の彼岸会の盛大さ、念佛結衆の眞剣な動きがよく伝わる石造宝塔であるといえよう。

金剛寺遺跡の羯磨墨描土器

大阪府泉南郡阪南町にある金剛寺遺跡の一画が関西国際空港建設に伴う土砂採取用地となり、大阪府埋蔵文化財協会が発掘調査を実施し



た。その成果は一九八七年『金剛寺遺跡』として刊行され、貴重な知見をもたらした。中世の礎石建物、石積み遺構、土壇や溝といった遺構のほか、中世の包含層中から、多くの軒先瓦と共に土師質土器Ⅰ皿形土器に十字に三鈷杵を墨書きした珍しい資料二点を見出したのである。

この土師質の皿形土器は口径八センチの小皿であり、二点とも底部は指おさえて調整されているという。口縁部を外方に強くナデて端部を肥厚させている。この小皿二点の内底面に件の墨描きがみられるのである。十字に三鈷杵を組み合わせる。密教法具、羯磨の姿である。

羯磨は羯磨金剛と呼ばれるが、羯磨輪、羯磨杵、十字金剛、十字縛日羅などの名も与えられている。いずれにせよ、羯磨を墨描きした土師質皿の発見は天下の初例と言えよう。

この土師質皿の羯磨は非常に特色ある形状で描かれている。鋒又は一般の羯磨と異なるところはないが、杵部が長く、上下の蓮華文帯で飾る羯磨例は極めて少なく、しかも上下蓮華文帯を扼する扼帯の表現を欠く点も一般の羯磨と異なる所、さらに中央の鬼目部分は中房の周囲に蓮弁文をめぐらせるのが一般的であるが、本例は中房内に十字四弧文を容れ、周囲の蓮弁・菊弁文を欠くというように一般例と大きく異なる在り方を見せている。

恐らく、土師質皿に描画する時、傍らに羯磨を置き見ながら描いたり、熟知していた場合、果たしてこうした特殊な「異様さ」を横溢させた皿絵が登場するかどうか問題であるが、時代の推移の中で羯磨が持

つこうした約束事がくずれ、やや任意の形で表現し、それが許される時代を背景とする表現と見てよいであろう。室町時代末、あるいは江戸時代前期の羯磨表現と見なされるのである。描きなれた筆緻での描法であることも注目を惹く。

羯磨の形は『略出経三』に「輪壇華座上に羯磨跋折羅を描く、形は十字の如く、みな鋒叉あり」とのべられている。三鉢が四方に出る結果、十二鋒叉となるが、この形から三四十二、即ち十二因縁摧破の意味をもつとされている。十二因縁は、無明、行、識、名色、六處、触、受、愛、取、有、生、老死の十二支を指すという。無明、愛、取の三者は、煩惱を性とし、行と有は業を性とし、識、名色、六處、触、受、生、老死は事を性とす。

煩惱、業を性にする五支は因、事を性とす七支は果、併せて因果となるという。煩惱(感)から業を生じ、業から事を生ずるといふように循環相続して生死絶ゆることなきを明証する法具として羯磨がその形を与えられているというのである。また、流転の十二因縁を破って涅槃の十二因縁とする意味をもつと説くものもある。いずれにしても修法作業成就をはかるために大壇の四隅に配置し、四方面を守護、四方魔の摧破に働くのである。

ふつう、中房の周囲を蓮弁で飾る羯磨は金剛界壇に、菊弁で飾る羯磨は胎藏界壇に用いられると考えられている。しかし、本例の場合、中房周囲の蓮、菊弁の表現を欠くだけに、そうした金剛界、胎藏界壇

配置といった意味をもつものでないことは確か、恐らく大壇に用いられるものでないことも明らかである。金銅製羯磨と異なり、土師質皿に墨描されること自体が、羯磨の本義から離れた形で機能していることを示しているのである。

金銅製羯磨は大壇に配置される時、羯磨台、または羯磨皿と呼ばれる台皿が用いられる。多くは大きな中房の周囲に莖帯を巡らし、外縁を八弁の蓮帯文で表現する台皿である。羯磨皿と羯磨のこうしたセット関係を見ると、土師質皿は文様表現を欠くものの羯磨皿、描かれた羯磨文は台皿上の羯磨の表現とみなしてよく、描くことでセット関係を示していると言える。輪宝墨描土器が輪宝皿上の輪宝であることと規を一にする表現と言えよう。

金剛寺遺跡発見の羯磨墨描土器は二点、本来は大壇の四隅に安置されるものであるから四点、或いは中央にも配して五点で組み合うものと考えられる。規矩から見て蓋と推察される土師質皿もあり、蓋、身の関係にあったことが推察される。岐阜県伊夫貴神社発見の輪宝墨描土器が蓋を伴い五点、東・西・南・北・中央の註記をもって発見されている事実が想起される。四方を結界し、内部を鎮める地鎮、鎮壇の機能をもつことが知られる。

羯磨墨描土器も相通ずる機能をもつと見てよいのであろう。輪宝と羯磨はしばしばセットとして用いられ、共に輪宝皿、羯磨皿も併用される関係にあるからである。結界、地鎮鎮壇といった地鎮めの祭りが

金剛寺で実修され、基壇や建物、屋敷地の四隅を点じて用いられた祭具がこの資料であると見てよいであろう。

長松遺跡の金箔を貼る土器

新潟県岩船郡神林村に所在する長松遺跡は圃場整備事業の過程で発掘調査され、種々の知見をもたらした重要な遺跡である。調査は二次にわたる確認調査の後、平成二年度、本格調査が実施され、成果は平成三年三月、神林村埋蔵文化調査書第三集『長松遺跡発掘調査報告書』として刊行された。

この長松遺跡で注目されるのは「金箔をはる土師質皿」である。この土器は、口径一二・六センチ、高さ二センチ、底径七・六センチのかわらけ皿であり、轆轤、ヘラ削りの手法が見られる。調査者の報告によれば、この皿形土器は十五世紀前半に製作されたもの、しかもこの岩船郡の陶土を用いたものではなく、遠く隔たる河内―大阪産の土器であろうと説かれている。

内面全体と外面の一部に金箔（金粉）が見られるのである。この金箔貼皿形そきは中世のSB七七と番号された東西軸の五間×三間の掘立柱建物の西から二間目柱筋を東外へ延長した位置に掘られたP九〇と呼ぶ小穴の覆土上層から一点単独で発見されたものである。その穴の位置、金箔貼土器という特異な性格から考えて、大形の掘立柱建物

SB七七と関連する地鎮、鎮壇の遺構・遺物、或いは若子誕生の際の胞衣皿と考えてもよいであろう。

この長松遺跡の性格については、調査担当者、田辺早苗さんは、十五世紀、室町時代に最盛期をもつ寺院跡と考え、この遺跡のある神林村は当時色部氏本家の支配地、同氏は平林城に館を置き、この遺跡―長松寺遺跡と深い関係を結んでいたのではないかと推測されている。色部氏は鎌倉時代地頭として、また戦国時代には越後守護代上杉氏の家臣として活躍する家柄である。その勢威もあって、金箔貼土器がはるばる河内からこの地に運ばれ、その後、この地域で用いられ、やがては地鎮・鎮壇、胞衣鎮納などの用に転じたのであろう。

長松遺跡の金箔貼土器の発見と係って想起されるのは、山口県山口市に所在する大内氏館跡発見の金箔貼土器―土師器皿である。一九八二年、同市で刊行された『大内氏館跡IV』にその詳細が記されている。この皿の発見された遺構は、館内の東南部土塁内側の第一号井戸である。報告書では「この井戸は、上面の内法で東西直径一三〇センチ、南北直径一二〇センチ、石積みは、深さ約四メートルあり上部の石は取り除かれていると考えられる。井戸の底は砂礫層で現在は湧き水は認められない。この井戸内の下部堆積土から、金箔をはりつけた土師器の皿が出土している」と述べている。問題のこの土師器の皿は「第一号井戸から三個体分が出土しており、一個体はほぼ完形品であり、二個体分は破片である。金箔土師器は、土師の皿の外面に薄い金箔を

はりつけたものと、土師器の内外両面に薄い金箔をはりつけたものがある。金箔は、茶褐色の漆で土師器の器面にはりつけられている。」とのことである。完全な一例は「皿の外面に金箔をはりつけられたもので、内面には金箔をはりつけた痕跡は認められない。口径一五・〇センチ、器高二・五センチである。器肉の厚さは、底部で三ミリメートル、体部から口縁部にかけて四ミリである。器形は、大内氏館跡の他の遺構から多く出土する厚手の土師器の皿と同じで、整形や胎土も全く同様である。」と記述されている。この大内氏館跡は一三六〇年ごろから一五五一年まで守護所が置かれた所である。具体的に第一号井戸の用益された時期は不明であるが、十五世紀前半と考えてよいであろう。調査報告書には「金箔をはりつけた土師器は井戸を埋める際の祭祀に使用されたものと考えられる」と述べている。

金箔を貼る土師質の皿は、求めればなお各地に類例を見ることができであろう。いずれにせよ、中世、こうした特色ある文物が西の京都として、また多くの貴紳や宗教者などを迎えて時代を拓いた大内氏の館といった卓越した遺跡から見出されるだけでなく、越後・色部氏ゆかりの長松寺遺跡から発見されることも併せ考えれば、広く為政者の周囲で用いられたものであることが理解される。

こうした金箔をはる土師質の皿の用途は、現実に地鎮・鎮壇に關係するかと想像される小穴に据えられていたり、井戸を埋める際の祭儀に際し井底に配されていたとされる遺構自体の語りから判明してくる

が、本来の用途は別にあるのではないかと考えるのである。たとえば『金銀図録』の掲げるところでは「外亀甲形金紙一枚裏無地金紙一枚中黄青赤紙各一枚紅白水引ニテ結エ劔先ヨリ底マテ長サ七寸七分許」と註された砂金裏が描かれ、その横に「表金箔」と記された地肌土色土師質皿を描き、さらに二枚の円形の刳物をあげて「木ヲ図ノ如ク丸ク平メニ造リ中ヲ刳リ二ツ合釘ニテ動カザルヤウニス」と註した絵様がある。文では砂金を直接容れるのか、或いは砂金を一両単位づつ白紙にて包み紙捻で結んだ包みをいくつか容れるのかは定かでないが、ともかくにも華美な砂金裏が主役となっているのである。この砂金裏に伴って描かれた二枚の円形の刳物は、高台一圍台にあたる役割を果たし、この上に金箔を表にはる土師質の皿が載せられるのであろう。とすればこの皿の上に置かれるものは前記の砂金裏と考えられることになる。同書では、こうした絵様に後三年合戦繪に見える砂金図として四脚を側辺に配した方函中に、色紙を敷き立て内に宛も鏡餅のようにつつまれた砂金の絵を掲げている。この絵の型をふまえれば、脚は円形刳物に、方函は金箔を貼る土師質の皿に、色紙と砂金は砂金裏に変化していることが読み取れるであろう。

砂金の贈答、砂金の保管に、砂金ゆえの華やかさが漂う。金箔を貼る土師質の皿はそうした日、一層の華美を添える器として登場するのである。金箔を貼る皿の用途は多岐にわたるが、ここに重要な一面が垣間見られるのではないかと考えるのである。